

ひまわり



令和2年7月14日(火)

医療の進歩に期待



アルツハイマー病という病気があります。一般的には認知症と呼ばれています。皆さんも耳にしたことがあると思います。本日、漫画家の蛭子能収さんが軽度認知症になったと報じられていました。代表的な症状は記憶障害です。他にも適切な言葉が出ない、判断力の低下などが初期の症状です。病状が進行するにつれ、物をなくしたり置き忘れたりする、日常作業に時間がかかるようになるなどの症状がきつくなります。さらに進行すると、家族や友達の認識ができなくなったり、幻覚症状が出てくることもあります。

3年前、大切な家族が認知症であると診断されました。医師から、治療方針、今後予想されること、介護する家族の心構えなどを丁寧に説明していただきました。この病気は治すことはできません。今できることは、投薬によって進行を遅らせることです。しかし、誠意ある医師の的確なアドバイスで、私たち家族はすべてを受け入れることができました。

「私たちのことを忘れる日がくるかもしれないけれども、いつまでも元気でいてほしい」と家族の誰もが思っています。

iPS細胞の生みの親は、京都大学の山中伸弥教授です。ヒトiPS細胞の作製に成功したと報じられたのは2007年。それ以降、この細胞を使ったさまざまな実験が行われてきました。その成果として、病気の治療につながったものもあります。まだまだ多くの可能性を秘めた細胞であることは間違いありません。

そのような中、期待できる話題がありました。iPS細胞を使ったアルツハイマー病治療薬(iPS創薬)製造の可能性です。iPS細胞を使った実験で、アルツハイマー病の原因物質を減らす効果がある薬が発見されたのです。この薬を、患者さんに投与する実験(治験)を今月中から実施し、その効果を確かめるといいます。

高齢化の時代、2050年には世界の患者数が1億人を超えるとのデータがある認知症。この実験でよい成果が出れば、患者さんはもちろん、その家族にとっても朗報であることに違いありません。医療の進歩は、人に寄り添い、人を幸せにするものでなければならない、そんなことを再確認した話題でした。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。

